

夏目漱石の学歴

小林 洋一郎

序

漱石（本名、夏目金之助）は、「学制」期における初等教育の洗礼を受けた人である。また、明治以降の近代学校教育制度が確立されていく時期の中等及び高等教育を受けたのである。すなわち、小学校設立期の明治七年に七歳で入学し、さまざまな学校を経験し、明治二十六年帝国大学文科大学（英文学科）を卒業したのである。さらにまた大学院に進学し、明治二十八年四月に教師として独立するまで在籍したのである。

筆者は以前に、教育者としての漱石に関心を持ち、「夏目漱石の教育観と教師としての漱石」という小論を書いた。⁽¹⁾これは主として松山中学校の教師となつてから、明治四十年に東京帝国大学の教師を辞職するまでの漱石を対象として考察したものである。漱石が当時最高の学歴と英文学に関するすぐれた学識を有していながら、どうして東京帝国大学の教師を辞職したのかということに

については、いろいろな理由が考えられるが、何よりも作家として独立することが、自分の才能と個性を生かす道であると確信したからであろう。先の小論でも指摘したのであるが、漱石自身は、自分の教師としての適格性に疑問をもっていたのである。実際の教師としての漱石は、多くの学生たちに尊敬されたのであるが、同僚や学生たちとの人間関係のわずらわしさ、また、自分の教育観と現実の生徒達とのずれに悩んでいたとも思われるのである。

作家として、人間教師として親しまれている文豪夏目漱石の学令期の教育状況はどうであつたのであろうか。漱石の学歴を通して、明治期の漱石の受けた教育の実状を考察し、漱石の学歴の不明であつた部分を明らかにしたいと思う。

一、学歴年表

最も詳細な漱石年表と、漱石の伝記として定評のある

小宮豊隆著「夏目漱石」⁽³⁾ および文部省年報を手がかりとして、漱石の学んだ学校を調べてみると次のようである。

明治七年（一八七四）七歳

●十二月、戸田学校（第一大学区東京府管内第五中学区
第八番小学、明治七年設立）

下等小学第八級に入学

明治八年（一八七五）八歳

●五月、戸田学校下等小学第八級・第七級卒業

●十一月、戸田学校下等小学第六級・第五級卒業

明治九年（一九七六）九歳

●五月、戸田学校下等小学第四級卒業

●六月（推定）、市谷学校（第一大学区東京府管内第三
中学区第四番小学、明治六年設立）

下等小学第三級に転校

●十月、市谷学校下等小学第三級卒業

明治十年（一九七七）十歳

●五月四日、市谷学校下等小学第二級卒業

●十二月一日、市谷学校下等小学第一級卒業

明治十一年（一九七八）十一歳

●四月二十九日、市谷学校上等小学第八級卒業

●十月二十四日、錦華学校（第一大学区東京府管内第四
中学区第二番小学、明治六年設立）

尋常科第二級後期卒業

明治十二年（一九七九）十二歳

●三月、東京府第一中学校（東京神田区表神保町、明治
十一年設立）正則科第七級乙に入学

明治十四年（一九八一）十四歳

●一月（推定）、東京府第一中学中退

●四月（推定）、漢学塾、二松学舎（東京麹町区一番町、
明治十年設立）に入学

●七月、二松学舎第三級第一課卒業

●十一月、二松学舎第二級第三課卒業

明治十六年（一九八三）十六歳
（一年以上通塾したと推定される）

●九月（推定）、私塾、成立学舎に入学

（一年程通塾した）

明治十七年（一九八四）十七歳

●九月、東京大学予備門入学

●十二月、東京大学予備門、四級（第一年）在籍

明治十八年（一九八五）十八歳

●三月、東京大学予備門、第二学期の成績（百十六人中

二十七番

明治十九年（一九八六）十九歳

●四月、（東京大学予備門は第一高等中学校と改称）

●七月、第一高等中学校予科二級留年となる。

明治二十年（一九八七）二十歳

●一月、第一高等中学校予科第二級（首席となる）

●九月、第一高等中学校予科一級に進級

明治二十一年（一九八八）二十一歳

●七月九日、第一高等中学校予科卒業

●九月、第一高等中学校本科第一部（文科）進学、英文

学を専攻

明治二十三年（一九九〇）二十三歳

●七月八日、第一高等中学校本科一部（文科）卒業

●九月、帝国大学文科大学英语文学科に入学

明治二十五年（一九九二）二十五歳

●五月三日（東京専門学校で教え始める）

明治二十六年（一九九三）二十六歳

●七月、帝国大学文科大学卒業（英文文学科第二回生、二

人目）

●七月十日、帝国大学大学院に入学

●十月（東京高等師学校英語嘱託となる）

明治二十八年、二十八歳

●四月十日、大学、高等師範学校、東京専門学校を辞

して、愛媛県尋常中学校の嘱託教員に就任する。

二、小学校の卒業試験

漱石の自叙伝といわれる作品「道草」の中で、一番古い小学校の卒業証書には、「第一大学区第五中学区第八番小学」などという朱印が押してあったところがある。この学校は、明治七年十二月に設立された戸田学校であり、漱石は設立されたばかりのこの学校の下等小学第八級に入学したと推定されるのである。文部省第二年報⁽⁶⁾（明治七年）によると、教員男五名、生徒男六十四名、女三十五名となっている。

「学制」⁽⁶⁾の第二章から第六章によると、全国を八大学区に分け、さらに各大学区を三十二の中学区、各中学区を二一〇の小学区に分け、それぞれに大学校、中学校、小学校を各一校設けることとした。そして文部省は「学制」施行に関する当面の計画の第一として、小学校の普及発達に最も力を尽したのである。

教育制度発達史によると、文部省は「学制」頒布の翌月即ち明治五年九月八日、「小学教則」を制定し、「学制」実施の方法を明示した。「小学教則」は、「学制」の規定した大綱に基づき、上下二等の小学を各八級に分け、下等八級より上第一級に至る毎級の期間を六か月とし、毎週日曜日を除き一日五時間、一週三十時間とし、「学制」に規定した学課を各学級に配当し、教科書を示して、教授方法の概要を示した。⁽⁷⁾

「小学教則」の第一章に、「小学ヲ分テ上下二等トス下等ハ六歳ヨリ九歳ニ止リ、上等八歳ヨリ十三歳ニ終リ上下合セテ在学八年トス」と規定されている。したがって児童は、学齢に達すると、まず下等第八級に入り、漸次進級して第一級に進み、それを修了すると「大試業」（卒業試験）を課せられた。落第生は、なお六ヶ月下等第一級にとどまる。合格者は上等第八級に進学し、下等と同様に累進して第一級の学業を修め、「大試業」の合格者が、中学へ進学することになっていた。⁽⁸⁾

漱石は慶応三年二月九日（旧一月五日）生れて、翌年の十月二十三日（旧九月八日）に明治元年と改元されているので、小学校に入学した明治七年十二月というのは、満七歳と十か月になる。明治六年の六月には入学してい

てもよかったはずであるから、一年半遅れて入学したわけである。漱石は二歳の頃に、塩原家の養子として入籍され、養父昌之助の長男として登録されていた。ところで明治七年四月頃には、養父母の不和のために一時実家に引きとられているが、同年十二月頃に、新設されたばかりの戸田学校に入学するため、漱石は浅草の養父のところに戻されたのである。江藤淳は、『漱石とその時代』において、「……政治・経済の両面にわたって大きな変動のあったこの年（明治七年）は、近代的な学制が実施にうつされはじめたという意味でも画期的な年である。戸長の職にあった塩原昌之助は、もちろん教育に「近代」を導入しようとするこの国策に率先して協力すべき立場にあった。しかも金之助（漱石）が入学させられた戸田小学校は、養父の家のすぐ隣の浅草寿町十一番地にあった。彼がこうして、近代的な学制によって教育された明治の日本人の最初の世代に属していたということは、記憶にあたいる事実である。」と述べている。⁽⁹⁾

漱石は、一年半遅れて入学したけれども成績優秀のために、翌年の明治八年五月には、戸田学校の下等小学八級と七級を同時に卒業し、さらに十一月には、同校の六級と五級を同時に卒業して、一年のおくれをとりもどし

ているのである。⁽¹¹⁾つまり漱石は試験の結果、八級と六級を飛び越して進級しているのである。それにしても「小学教則」の規定によらずに、このような飛び級がどうして可能だったのであるうか。等級試験については、学制の「生徒及試業の事」⁽¹²⁾の中の第四十八章から第五十一章に規定されている。各府県ではそれぞれこの規則にもとづいて、細則を定めて実行したのである。東京府の場合、明治五年から九年まで施行された試験規則⁽¹³⁾がある。第十四条までであるが、漱石の飛び級に関連しているものをいくつかあげてみよう。

試験規則

第一条、試験に三様アリ。一ヲ月末小試験トシ、一ヲ定期試験トシ、一ヲ卒業大試験トス。

第二条、毎月月末小試験ヲ行ヒ、生徒学業ノ進否ヲ判ジ、座次並名札ヲ上下スベシ。

但小試験ハ其校教師ノミニテ行フモノトス。

第三条、定期試験ハ毎年兩度ト定ム（四、五ノ二ヶ月ヲ前期トシ、十、十一ノ二ヶ月ヲ後期トス。）

但予メ各校試験ノ序次ヲ定ムベシ。

第四条、定期試験ノ外学業優等ノ者ハ、臨時試験ヲ行ヒ、昇級セシムルコトアルベシ。

第十三条、及第生徒格別優等ノモノニハ、即日第五課吏員ヨリ賞賜ヲ与フベシ。

第十四条、及第生ニハ左ノ雛形ノ通り、該校ニ於テ卒業証書ヲ与フベシ。

但学区取締モ立会フベシ。

この試験規則は、漱石が小学校の試験を受けたとき、この規則のかんりの部分が適用されたと思われるのである。その後改正されて、とりわけ十年二月に規定された「東京府小学校試験ノ定」の如きはもっと詳細をきわめたものであったらしい。⁽¹⁴⁾

先にあげた試験規則の第三条によって、定期試験の実施時期が前期と後期の二回あったことがわかる。そして、第四条に飛び級に相当する臨時試験による昇級の規定がある。漱石は明治八年の前期と後期の二度にわたって昇級したのである。また、第十三条により、学業が格別優等なものには、賞品が与えられることになっている。漱石は『道草』の三十一の中で、「証書のうちには賞状も二三枚交っていた。昇り竜と降り竜で丸い輪郭を取った真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に断ってあった。」と書き、続いて、時

には「書籍」もあつたようで、「勸善訓蒙」の輿地誌略だのを抱いて喜びのあまり飛んで宅へ帰った昔を思い出した。」と当時を回想している部分がある。小宮豊隆によると、漱石の家に保存されている賞状は、合計三枚であるということであるが、そのうち写真で見ることのできる明治十年五月八日の賞状には、「書籍」という朱印が捺してある。⁽¹⁶⁾ また、写真でみる明治十一年四月二十九日の日付のある市谷小学校上第八級卒業の時のものには、「筆墨紙」の印がおされているのがわかる。そうしてみるとこの他にも何度か同様の優等の賞状をもらっていると思われる。

漱石は、戸田学校下等小学第四級を終了した後、養父の家の事情により、明治九年六月頃、市谷学校の下級小学三級に転校し、実家より通学したと推定されている。

文部省第二年報と第四年報にある公立小学校一覧表により、転校する頃（明治九年）の戸田学校を設立当時（明治七年）と比較してみると、教師は男教員五人で変わりが、生徒数は男児が六十四人から百四十六人に、女児が三十五人から七十七人と二倍以上に増加している。一方転校した市谷学校は、戸田学校と同じ七年の設立であり、当初と比較して転校した頃は、教師は男性四人で

変わらないが、生徒数は男児が四十八人から八十二人に、女児が十五人から三十八人とやはり二倍を越える増加ぶりである。校舎については、戸田学校は新築であり、市谷学校は旧民家を改造したものであった。一般に当時はまだ寺院や民家を借りたものが多く、設備その他の点で不十分であつたと思われる。

市谷学校で漱石と同級であり、熊本高等学校で同僚でもあつた篠本二郎は、漱石が転校してきた頃の思い出を書き、その中で市谷学校について次のように述べている。「余と夏目君と相識りしは、明治六年頃と記憶する。牛込薬王寺前町に一の小学校が設立された。其の近傍の小供は、士となく商となく、一樣に入学を許された。大抵年齢によりて、上は一級より下は六級まで分たれて、六級より三級までは、男女混合であつた。余と夏目君とは三級にて、而も同じ腰掛に座を占めて居た。当時の小学校は、校舎其他の設備不完全なりしのみならず、先生も六七十位の漢学者も交り、又洋算など教へらるゝ先生には、二十歳前後の人もありて、極めて乱雑なるものであつた。或時六十許の先生が、福澤塾出版の世界国尽しによりて、舶来の洋文字入り東半球の図を掲げ、緩る緩る世界国尽しと引合せて、亜非利加北部の国々の名を覚束

なく指示された……。」⁽¹⁸⁾これは、市谷学校だけではなく、当時の小学校の一般的な姿であった。

三、指導方法一般

明治六年の師範学校創定小学教則概表の下等小学教則をみると、大体は、読物、習字、算術の三主要教科をもって第八級から第一級までを貫いており、寺小屋からの連続性を示しているが、問答という独自の教科を設け、アメリカにおけるペスタロッチ主義の影響を認めることができる。

教育方法一般について、寺子屋では個別教授法が中心であったと思われるが、学制以後の学校になって多数の生徒を教えるようになると、一斉教授法のやり方が必要になってくる。そして、教室には黒板が設置され、掛図、教科書などの教材教具も準備されるようになってきたのである。

「学制」の実施には、教員の養成が先決問題となっていた。文部省は、明治五年五月二十九日、東京師範学校を設立した。これが明治最初の師範学校で、明治五年八月、諸葛信澄が校長となり、指導者としてアメリカ人、

M・M・スコットを招いた。彼は、明治五年九月より七年八月まで東京師範学校に在職し、アメリカから教科書や教具を輸入して、師範学校の生徒に小学授業法を実演したのである。スコットによって近代化されたわが初等教育の実際が成立したのであった。⁽²⁰⁾

スコットによって伝えられた授業の方法は、諸葛信澄著『小学教師必携』（明治六年十二月）及び『補正小学教師必携』（明治八年四月）によっておおよそ知ることができる。後者によってみると、まず、緒言として二十一項目にわたり、教師が心得なければならない一般的事項が述べられている。⁽²¹⁾いくつかを要約して紹介すると次のようになる。

一、教師というものは、唯学問芸術を身につけているだけでなく、よく子どもを指導して、自立できるようにしてやるのが役割である。

一、子どもは父母のもので自由に生長してきたので、最初はきびしくすることなく、順序をふまえて指導すること。

一、子どもを指導するには、遊びや運動等にも気をつけ、過度の勉強をさせないこと。

一、子どもが質問等するときは、気分をなごやかにし

て、十分意を組み取るように配慮し、丁寧に答えてやり、質問するのが楽しいものになるようにすること。

一、毎月生徒の学術を試験し、その優劣にしたがって座席を決めること。

一、授業中、教師が教室を出るときは、第一席の生徒に教師の代りをさせること。

一、授業時間以外は、できるだけ教室に残らないようにし、教師も遊び場に出て、危険のないように指導する。

一、下等小学の生徒は、男女を混同して教授するとしても、座席の男女の列を別にして、遊場は男女別に区域を分けること。などをあげている。

次に、指導方法（教則）が、下等小学の第八級より第一級まで、科目別に示してある。⁽²²⁾例えば、第八級の「問答」の項では、「単語図ヲ用キ、図中ノ画ヲ指シ示シ、其物品ノ性質或ハ用キ方、或ハ食シ方等ヲ問答スベシ。」とあり、「柿」と「筆」の例をあげている。また、生徒が答えるごとに、答を板書しておいて、一列一緒に復読させることも必要であるとしている。

四、公立中学校の受験と退学

ところで、漱石は明治十一年四月、市谷学校の上等小学第八級を卒業したあと、同じ年の十二月には、錦華学校「小学尋常科二級後期」を卒業しているのである。この点について、小宮豊隆は、なぜ漱石が転校したのか、その理由ははっきりとは分からないとしながらも、設備がよく当時名家の子弟が多く集ったと言われていることをあげている。⁽²³⁾明治九年の記録であるが、錦華学校は、明治六年の設立で、新築の校舎を持ち、教員は男性十人、生徒は男子一九一名、女子一四八名となっており、その頃としては大規模校である。次に彼は、「それにしても明治十一年の四月に市谷学校の『上等小学第八級』を卒業したものが、同じ年の十二月に錦華学校の『小学尋常科二級後期』をどうして卒業し得るのであるか。当時の小学校は八年制である。」⁽²⁵⁾と疑問をなげかけている。この点について小宮は、当時の小学校は、上等小学八級七級というのはほとんど最上級で、多くの小学校はそれ以上の教育をしていなかったという報告と、当時の錦華学校が六年制の小学校であったということをもとに、漱石が市谷学校の上等八級を卒業した後、錦華学校の二級後

期に入学したということも考えられるが正確なことは分からな⁽²⁶⁾いとしている。この点については後で制度的な考察をするが、上等八級卒業（五年前期終了）から尋常科二級後期（五年後期）に転入することができたのは当然であると思われる。しかしまた、翌年の明治十二年三月には、十二歳で東京府第一中学に入学しているのであるが、漱石は錦華学校の一級を終了しないで入学したのかどうか、そういうことが可能であったのかどうかが問題である。

「学制」に述べられている内容は、西欧の教育制度をモデルとしており、日本の現実条件に添わない点も多くあったので、実際は相当の変形を余儀なくされたのである。明治十一年頃になっても、上等小学の在籍生徒数はきわめて少なく、一%程度⁽²⁷⁾のところが多かった。したがって、「小学校の修業年限なども府県によって、六年制、八年制、一等、二等、三等、甲種、乙種、丙種といったものが定められ、教則も様々に編まれるという風になっていた。」⁽²⁸⁾とあるように、実情に合うように改められてきていたのである。つまり、「各府県は民費の節約、教育費の節減のため、小学校の年限を短縮し教科を簡素化し実用化する必要があり、他方では巡視の文部高官から

つよく教則の自由化を指導されたので、十年の後半から十一年・十二年にかけて、ぞくぞくと小学教則の改正を文部省へ伺い出た。」⁽²⁹⁾のである。「学制後期府県小学教則の改正一覧」によると、東京府は男子女子各尋常教則を六年六級（簡易科教則は四年八級）とすることが、明治十一年四月にはすでに認可されていたのである。また「文部省は、明治十一年五月二十三日、布達第四号によって小学教則・小学教則概表・小学用書目録などを含む「学制」施行上の細則類二三件を一括廃止した。その九日前の五月十四日には「学制」改正の文部省原案「日本教育令案」が上進されており、今回の布達は「学制」修正への具体的措置の開始を意味していたのであった。」⁽³⁰⁾ところで、漱石の長兄大助は、明治九年頃には「開成学校」⁽³¹⁾に入学しており、漱石の勉強をみてやっていた。父親および大助は、小学校の成績がよかった漱石に期待をかけ、創立されたばかりの東京府第一中学校への入学をすすめたと推定される。「学制」の制度によれば、中学校には十四歳にならないと入学できないはずであるが、先にみたようにすでに明治十一年の五月には学制的効力は失われているので、やがて出される教育令を先取りした新しい中学校は、十二歳で入学できるはずである。

(附図の学校系統図、第一図と第二図参照)

文部省第六年報(明治十一年)における中学校一覧表⁽³³⁾によると、東京の公立中学校は、明治十一年(九月)設立の東京府第一中学(東京本郷区本郷元町)一校のみである。教員は男性十名で生徒数は男子一三名となっている。

東京府は明治十二年八月に次のように生徒を募集した。⁽³⁴⁾
前文は省略するが、二科各六十名の募集であった。

学 科 区 別

正則科、邦語ヲ以テ高尚普通ノ学科ヲ授クルモノ在学期
ヲ四年トス

変則科、大学法理文三学部ニ入ルノ階梯ニシテ英語ヲ以
テ普通ノ学科ヲ教ヘ傍国書ヲ授ルモノ在学期ヲ
三年トス

入 学 試 験 則

公立学校ニ於テ尋常ノ小学科ヲ卒業セシ者ハ試験ヲ經
スシテ正変則共ニ入学スルコトヲ得ベシ、其他ノ者ハ左
ノ試験ヲ施行シ入学ヲ許否スベシ

試 験 科 目

講義、日本略史物理階梯初学経済論各一葉
筆算、加減乗除ヨリ諸比例マテ三題

作文、日用往復文一題記事論説文一題片仮名交り

漱石は、明治十一年十月二十四日に小学校尋常科第二級を卒業しているが、翌年三月までに一級(前期、後期)を卒業したとは考えられないので、明治十二年三月頃試験により、入学を許可されたと思われる。

東京府は明治十二年六月には、第二中学を設置し、その八月生徒百名を募集し、九月から開業している。⁽³⁵⁾

明治十四年一月頃、漱石は第一中学を退学するのであるが、その理由を次のように述べている。「此の中学というのは、今の完備した中学などとは全々異っていて、その制度も正則と変則との二つに分れていたのである。正則というのは日本語許りで、普通学の総てを教授されたものであるが、その代り英語は更にやゝなかった。変則の方はこれと異って、たゞ英語のみを教えるというに止っていた。それで、私は何れに居たかと云えば、此の正則の方であつたから、英語は些しも習わなかつたのである。英語を修めていぬから、当時の予備門に入ることが六ヶ敷い。これではつまらぬ、今まで自分の抱いていた、志望が達せられぬことになるから、是非廃そうという考を起したのであるが、却々親が承知して呉れぬ。そこで、據なく毎日々々弁当を吊して家はあるが、学校に

は往かずに、そのまゝ途中で道草を食って遊んで居た。その中に、親にも私が学校を退きたいという考えが解ったのだらう。間もなく正則の方は退くことになったというわけである。⁽³⁶⁾」

漱石が新しい中学校を中退した理由は、予備門の試験に不利であるということ以上に、学校がおもしろくなかったということが考えられる。だから漱石は正則の方を退学してからもなお、約一年許りも二松学舎に通って、好きな漢学を専門に習っていたのである。⁽³⁷⁾

五、私立中学校の役割

二松学舎は、三島中洲により、明治十年に長男三島桂を主長として設立されたのである。文部省第六年報（明治十一年）によると、教員男性二名、生徒男子二四八名となっている。当時の私立中学校としては多数の生徒をかかえていたのであるが、明治十四年七月には、「中学校教則大綱」により「私立各種学校」に格下げさせられたのである。しかし、明治十四年当時生徒数は男子五六七人を数えている。⁽³⁸⁾『二松学舎百年史』にのっている明治十四年の入学者名簿の中に、東京下谷区西町四番地、塩

原金之助の名前がみえる。⁽³⁹⁾

漱石が学んだ明治十四年から十五年にかけて、二松学舎は五年制の学校であつたらしく、十四年の「二松学舎規則」によると、各年次別に学課が配当されていた。しかし、実際には左のような級別であつたと思われる。明治十二年から十五年までの課程はつぎのようであり、春秋二回の試験期を定めていた。⁽⁴⁰⁾

三級第三課、日本外史、日本政記、十八史略、国史略、小学。

三級第二課、靖献遺言、蒙求、文章軌範。

三級第一課、唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。

二級第三課、孟子、史記、文章軌範、三体史、論語。

二級第二課、論語、唐宋八家文、前後漢書。

二級第一課、春秋左氏伝、孝経、大学。

一級第三課、韓非子、国語、戦国策、中庸、莊子。

一級第二課、詩経、孫子、文選、莊子、書経、近思録、荀子。

荀子。

一級第一課、周易、礼記、老子、墨子、明律、令義解。

但し詩、文章は共通とす。

一方、入学もその実力に応じて随時受講せしめたが、多くは三級程度で、二級以上の学力を有する者は稀であ

ったという。漱石は、明治十四年七月には第三級第一課、同年十一月には第二級第三課を卒業している。

漱石は、二松学舎に学んだ頃について、次のように述べている。「講義は朝の六時から七時頃から始めるので、

昔の寺子屋をそのまゝ、学校らしい処などはちっともなかったが、（中略）元来僕は漢学が好で随分興味を有って漢籍は沢山読んだものである。（中略）考えて見ると

漢籍許り読んでこの文明開化の世の中に漢学者になった処が仕方なし、別に之と云う目的があった訳でもなかったけれど、此まゝで過ごすのは充らないと思う処から、

兎に角大学へ入って何か勉強しようと思った。⁽⁴¹⁾」そこで漱石は、大学予備門へ入るために、成立学舎へ転学し

て、約一年ほど一生けんめいに英語を勉強したのである。漱石は成立学舎について、「随分汚いものであったが、

授くところの数学、歴史、地理などいうものは、皆原書を用いていた位であるから、なかなか素養のないもの

には、非常に骨が折れたものである。⁽⁴²⁾」と述べている。

漱石が入学した頃の成立学舎は、大学予備門の受験生を対象とした予備校の一つとして、有名であったのである。文部省年報（明治十二年）によると、成立学校（舎）は、明治九年の設立で、校長は笹田惣右衛門であ

り、神田区今川小路にあった。教員数は男性八名、生徒数は男子七八名となっており、当時の私立学校と比較して教員数がかなり多いが、いろいろな科目を教えるために必要であったと思われる。

漱石は、明治十六年九月頃から成立学舎に一年位通学し、翌年の九月には、大学予備門の入学試験に合格したのである。このときの試験科目は、和漢文、数学、英語の三科目であったはずである。

六、東京大学予備門

明治十年四月、東京開成学校が東京大学となり、文部省所轄東京英語学校が東京大学予備門と改称され、東京大学法理文三学部の前科として発足した。予備門の教育課程は年ごとに改訂されているのであるが、その後、医学部予科の合併を経て、明治十七年六月法理文医四学部共通の教育課程が実現する過程において、次第に大学予備教育の内容も整備されていったのである。⁽⁴³⁾

改正予備門学科課程（明治十七年四月）⁽⁴⁴⁾によると、修学年限は一律四ヶ年となり、最初の二年間は英語か独逸語、後二年間は英独両語を兼修することとなった。漱石

が入学したときの第一年（第四級）の科目は、修身学、和漢文、英語、数学、地理学、史学、体操があったはずである。第二年から第四年まで画学があったことがわかる。

明治十七年九月より予備門は統合され、新制度は新入生に対し適用されることになった。九月に入学試験が行われ、受験者総数一〇六〇名、新制度の適用される「改正学科第四級生には、英語課一一六名、その他は合わせて五十六名が合格した」⁽⁴⁵⁾。

漱石は、自分が入学した頃の大学予備門について、「始め予備門の方の年数が四ケ年、大学の方が四ケ年、都合大学を出るまでには八年間を要することになっていったが、私の入学する前後はその規定は変じて、大学三年予備門五年ということになった。（中略）その予備門五年をも亦二つに分ち、予科三年、本科二年という順序でした」⁽⁴⁶⁾と述べているが、これは入学後のことと思われる。「東京英語学校を改造してできたこの大学予備門は、十八年八月東京大学の管理から離れて文部省が直轄することとなり、その制度を改めて、単に大学の予備教育機関であるばかりでなく、他の官立学校に入学すべき生徒をも養成する機関とした」⁽⁴⁷⁾。そして、その後明治十九年四月十日の中学校令によって高等中学校の制度が成立し、

同年四月二十九日大学予備門は第一高等中学校と改められたのであるが、その時予科三年、本科二年とに分れたと思われるのである。

漱石は予備門に入学した頃殆んど勉強せず、得意な学科もなく、中でも数学、英語に最も苦しんだといっている。⁽⁴⁸⁾成績はますます悪くなるばかりで、ついに予科二年の時落第という結果になったが、その後は真面目に授業にも出席し、卒業するまで首席を通したといわれている。

七、文科大学と大学院

漱石は、明治二十三年九月に文科大学英文学科に入学したのであるが、当時の文科大学はどうなっていたのであろうか。

明治十九年三月、帝国大学令が發布されて、従来の東京大学は帝国大学となり、文学部は分科大学の一つである文科大学に改組された。このとき、文科大学は、哲学科、和文学科、漢文学科に、新たに博言学科が加えられて四学科となった。⁽⁴⁹⁾修学年限は従来の四年から三年に変わった。

明治二十年九月には、史学科、英文学科、独逸文学科

が増設され、既存の学科と併せて七学科となったのである。このとき新設の三学科の教科内容（カリキュラム）の中に、教育学が加えられていることは注目に値する。⁽⁶⁰⁾ 漱石は、明治二十五年十二月に文科大学教育学論文として、「中学改良策」を書き、明治維新以降の中学校の沿革の考察を通して、一貫した教育の必要性、教師の資質の向上、生徒徳育のあり方を論じている。

ところで、明治二十二年六月に国史科が新設され、同時に従来の和文学科は国文学科に、漢文学科は漢文科と改称された。また、明治二十三年十二月には仏蘭西文学科が新設され、漱石が英文学科に入学してまもなく合計九学科となっていたのである。⁽⁶¹⁾

漱石が在学中にどのような科目の単位を修得したかは、卒業証書（写真）⁽⁶²⁾ によって知ることができる。それによると、ジェームス・メーン・デクソン他外人教師一名に、英語、英文学の指導をうけている。また、外人教師による史学とフランス語を修得している。その他には、ルドヴィヒ・ブッセの美学及び美術史、神田乃武（ないぶ）の羅甸語、元良勇次郎の心理学、井上哲次郎の東洋哲学、中島力造の倫理学、日高真實の教育学等を受講したのである。東洋哲学に関しては、「老子の哲学」というすぐ

れた単位修得論文が残っている。教育学の論文については先にふれた。

漱石の先輩には立花政樹がおり、明治二十四年七月に卒業している。漱石は明治二十六年の七月十日に、英文学科二人目の卒業生となったのであるが、それと同時に帝国大学大学院に入学したのである。

漱石が入学した頃の大学院規程は、東京大学百年史（資料Ⅰ）によると、明治十九年四月一日に制定され、翌年の七月七日に改正され、さらに、明治二十四年の三月十九日に第六條の但書が削除されているが、その規程により入学を許可されたはずである。⁽⁶³⁾

これによると、第一条では、専攻する学科を決めて総長に出願し、優等品行端正の者に限り評議会の議を経て許可されることになっている。第三条では、大学院の学生は、最初の二年間は研究生として研究することとなっている。第六条は、但書がとれて、大学院の学生は研究生の段階から授業料を徴収しないことになったのである。大学院生となった漱石は、神田乃武、ルドヴィヒ・ブッセから指導を受け、ケーベルの美学に関する講義などを聞いたと思われるのである。⁽⁶⁴⁾

以上で、漱石の学校歴の考察を終るが、漱石が学んだ

当時の教育機関の制度的位置づけや実態を多少とも明らかにし、漱石の学歴の不明な点やすきまを少しでもうるることができたのではないかと思う。

注

- (1) 小林洋一郎、「夏目漱石の教育観と教師としての漱石」、女子美術大学紀要、第四号、一九七三。
- (2) 漱石文学全集、別巻、集英社刊、昭和四十九年。本全集別巻は、荒正人著となっており、漱石の生涯に関する事項を可能なかぎり探索し、各年別、月日単位で記述されている。
- (3) 小宮豊隆、『夏目漱石』一、岩波書店、昭和四十一年。
- (4) 漱石全集、第十二巻、角川書店、昭和四十年、六一頁
- (5) 文部省第二年報、明治七年、府県公立小学校表、十六頁
- (6) 明治以降教育制度発達史、第一巻、昭和三十九年版、二七八頁―二八〇頁
- (7) 同書、三九七頁―四一七頁
- (8) 同書、三九八頁
- (9) 尾形裕康、『学制実施経緯の研究』、校倉書房、昭和三十八年、一四七頁
- (10) 江藤淳、『漱石とその時代』、第一部、新潮選書、昭和四十七年、五二頁―五三頁
- (11) 前掲書(3)、五六頁
- (12) 前掲書(6)、二八九頁
- (13) 前掲書(9)、一四七頁―一五〇頁
- (14) 同書、一五〇頁
- (15) 前掲書(3)、五七頁
- (16) 別冊「太陽」No. 32、一九八〇年、四十七頁

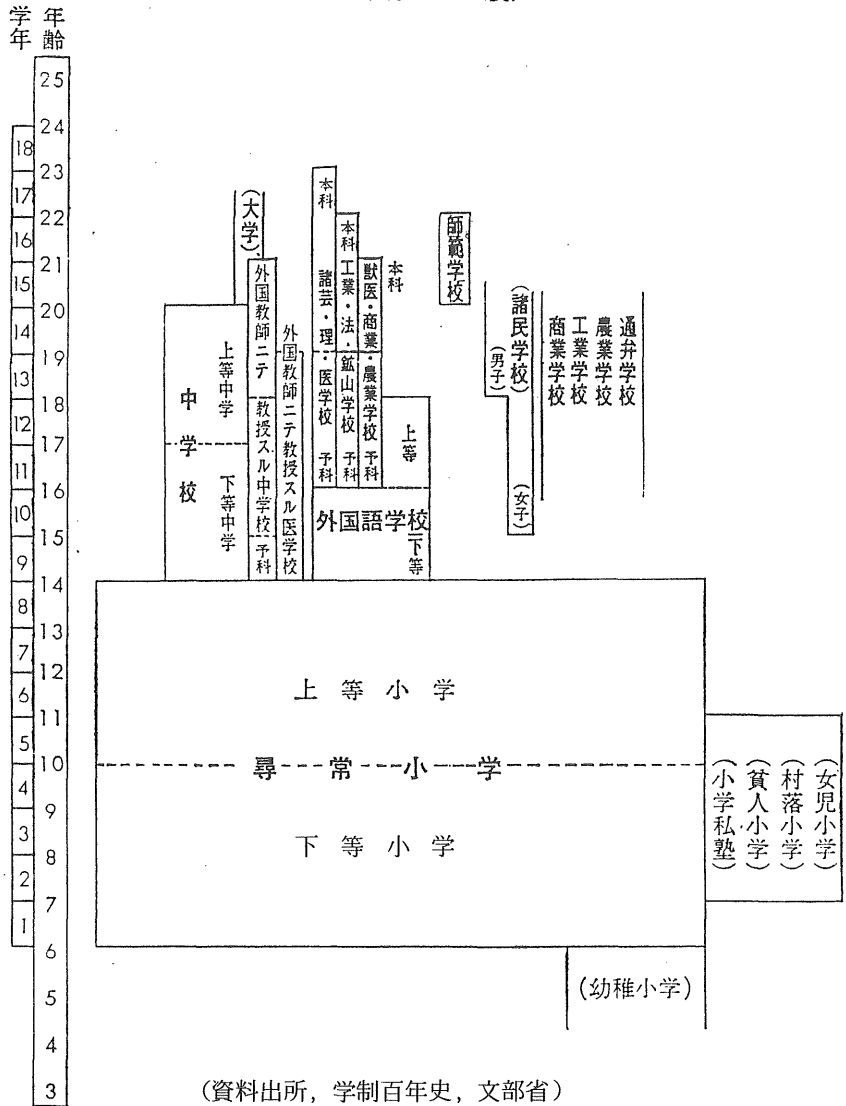
- (17) 明治の古典9、山本健吉編、吾輩は猫である、学研、一九八一年、一五九頁
- (18) 漱石全集月報、昭和三年版、岩波書店、一九七六年、一九〇頁
- (19) 教育課程事典、総論編、岡津守彦監修、小学館、一九八三年、六頁
- (20) 尾形裕康『日本教育通史』、早稲田大学出版部、昭和三十五年、一八四頁
- (21) 諸葛信澄『補正小学教師必携』、近代日本教科書教授法資料集成、第一巻、東京書籍、昭和五十七年、三十頁―三三頁
- (22) 同書、三四頁―四三頁
- (23) 前掲書(3)、六〇頁―六一頁
- (24) 文部省第四年報、明治九年、附録第二、府県公立小学校一覧表による。
- (25) 前掲書(3)、六一頁
- (26) 前掲書(3)、六一頁―六二頁
- (27) 日本近代教育百年史、第三巻、学校教育(1)、国立教育研究所、一九七四年、五三九頁―五四一頁
- (28) 島為男、明治百年教育史、(上)、日本教図、昭和四十三年、七三頁
- (29) 倉沢剛、『学制の研究』、講談社、昭和四十八年、八四二頁
- (30) 同書、八四三頁
- (31) 前掲書27、五二四頁―五二五頁
- (32) 明治六年四月十日、第一大学区第一番中学は専門学校に改組され、「開成学校」と改称された。
- (33) 文部省第六年報、明治十一年、三八五頁
- (34) 前掲書29、九〇六頁―九〇七頁

- (35) 前掲書29、九〇八頁
- (36) 漱石全集、第十六卷、別冊、岩波書店、昭和四十二年、六三五頁―六三六頁
- (37) 同書、「私の経過した学生時代」、六三六頁
- (38) 二松学舎百年史、学校法人二松学舎、昭和五十二年、一三〇頁
- (39) 同書、一六二頁
- (40) 同書、一二五頁―一二六頁
- (41) 前掲書36、「落第」、五〇〇頁
- (42) 前掲書36、六三六頁
- (43) 前掲書27、一一八八頁
- (44) 前掲書27、一一九四頁
- (45) 東京大学百年史、通史一、東京大学出版会、昭和五十九年、五九五頁
- (46) 前掲書36、六三八頁
- (47) 学制百年史、文部省、昭和四十八年、二二四頁
- (48) 前掲書36、六三九頁
- (49) 東京大学百年史、部局史一、四一八頁
- (50) 同書、四一九頁
- (51) 同書、四一八頁―四一九頁
- (52) 前掲書16、四十九頁
- (53) 東京大学百年史、資料一、七三七頁―七三八頁
- (54) 漱石全集、第八卷、角川書店、昭和四十年、「ケ―ベル先生」、二五〇頁

附図 学校系統図

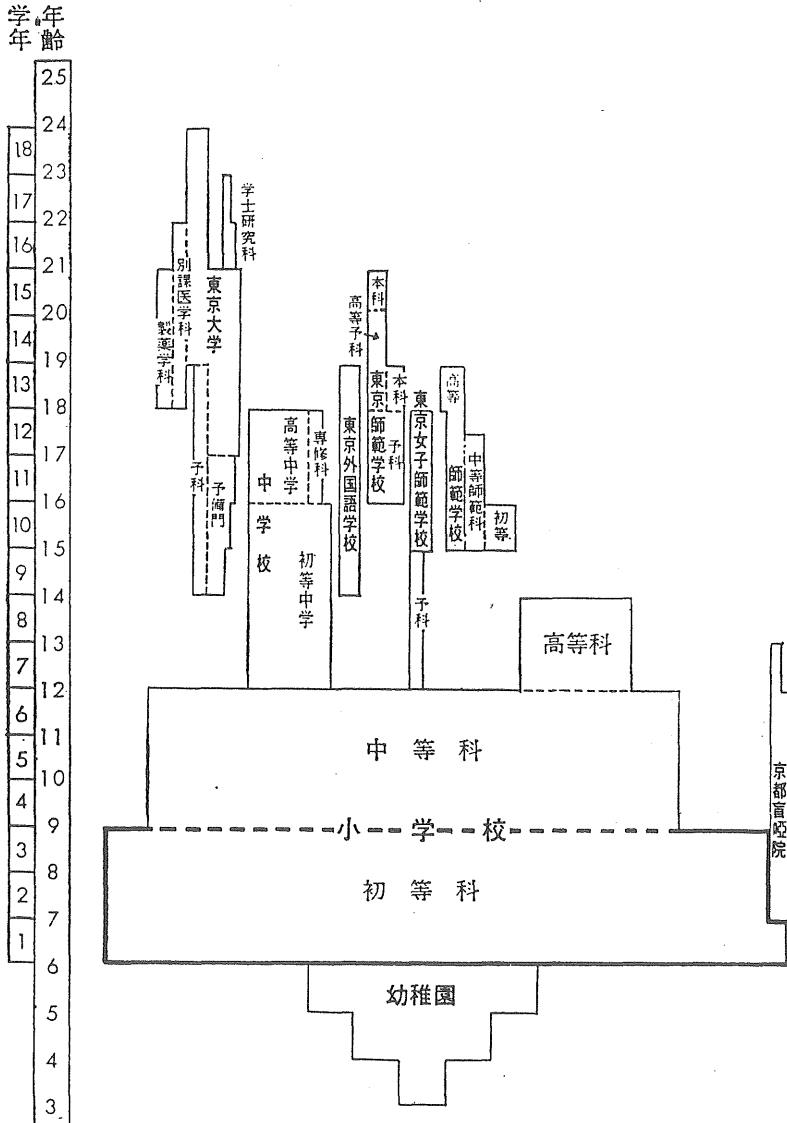
第1図 明治 6 年

(学制による制度)



(資料出所, 学制百年史, 文部省)

第2図 明治14年



(資料出所, 学制百年史, 文部省)